四族世界のレガリア

Edgar

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

この世界を支配していた〝人間〟という古代種が絶滅してから三百年。
四つの種族と四人の王によって平和な世界が築かれていた。
その世界でその二人は出会う。
故郷を離れ、自身の定めた〝目的〟を果たすために旅をする森人の青年・ヒューイ。
教会で、血のつながらない姉とともに暮らす幼い獣人の少女・マリア。
一見無関係な二人が出会うとき、この四族世界の運命が動き出す。
――王道異世界ファンタジー、開幕。
※小説家になろうでも「烏妣　揺」名義で連載中。

目次

プロローグ ―― 1
第一話「旅人と少女」（Ⅰ） ―― 9
第二話「旅人と少女」（Ⅱ） ―― 25
第三話「旅人と少女」（Ⅲ） ―― 34
第四話「旅人と少女」（Ⅳ） ―― 47
第五話「ヒューイの料理」 ―― 55
第六話「感謝祭と影」（Ⅰ） ―― 60
第七話「感謝祭と影」（Ⅱ） ―― 69
第八話「感謝祭と影」（Ⅲ） ―― 79
第九話「感謝祭と影」（Ⅳ） ―― 87

プロローグ

この世界は平和だと、彼――森人の青年ヒューイ・Ａ・ブラックソードは思う。

ここ三百年、戦らしい戦は起こっていない。森人、鉱人、獣人、竜人の四種族とそれを束ねる四人の王からなる四族同盟がしっかりしているおかげで飢えるヒトも無く、奴隷制度も廃止され、金はかかるが医療もおおよそ万人が受けられる。

まぁ、そこに行きつくまでには様々な苦難があったが、前任者がとんでもない反面教師だったからこそという部分も確かにある。

兎に角、今の時代は前任者の時代より遙かに平和で、安全ということだ。

ただ、それにも限度というものがある。

例え豊かになろうとも、災害や犯罪は無くならない。それらがもたらす突然の不幸によって散る命というのも少なくはない。

そういう不幸が万人に平等に降りかかるものだと思ったら大間違いだと、かつて故郷で師匠に散々扱かれた際にヒューイはそう言われた。

それは確か、弟子入り三日目でスチールウルフを狩って来いと群れのど真ん中に叩き

出されるという修行のあとだったか。
師曰く、星のめぐりが悪いヒトとやらがこの世界には存在していて、その人らは何もしなくとも不幸の方から寄ってくるのだという。
そして、お前は確実にそちら側だとも。
故郷から旅立って半年が経った今日。小雨が降る旧街道をフードを目深に被って、次の街へ急いでいた。
「おい、兄ちゃん。ちょっといいか？」
そこの途中の寂れた橋の上でヒューイの前に現れたのは、見るからにガラの悪そうな三人の男。顔の横から黒いふさふさした毛が覗いていることと、腰から延びるこれまた黒い毛におおわれた尻尾が見えることから三人とも獣人。
「ちょいと悪いが、俺たち金に困っていてね。悪いが金目のモン置いてってもらえないか？」
これはあれだ。いわゆる山賊と言う奴だ。
そう思ったヒューイは咄嗟に逃げる算段を立てようと後ろに視線を送る。
しかし、そこにも奴らの仲間と思わしき獣人の男が二人、立っていた。
ここは逃げ場のない橋の上、完全に嵌められた形だ。
こんなことなら旅費をケチらないで、安全な街道を馬車の定期便に乗って行くべき

だったなと後悔しても、もう遅い。
「申し訳ないが、先ほど財布を落としてしまってね」
もしかしたらと思って、正直に申告をする。
旅費が入った財布は、運の悪いことに紛失してしまい、さっきまで途方に暮れていたのだ。
「じゃあ、しょうがねぇなぁ」
そこで手前の山賊は、ニタニタと笑う。
まるでここまでの会話が予定調和だった、とでも言うように。
「殺して身ぐるみ剥ぐっきゃないじゃないか！」
「――そうなるか」
不幸、不幸だ。
どうしてこう不幸は重なるのか、俺が一体何をしたというのだ。
そうやってヒューイが自分の不幸を嘆いている間に、一番手前にいた男が使い古された山刀を引き抜いた。
「死ねやゴルァ!!」
こちらに向かって走り寄り、振りかぶった山刀が煌めく。
「まぁ、不幸はお互い様か」

「――、が、ごフっ？」

煌めいた山刀はそのままヒューイに向かって振り下ろされることはなく、だらりとその腕が垂れ下がる。

その山賊の首には、ヒューイのスローイングダガーが深々と差し込まれていた。

唖然とした奴らが正気を取り戻したのは、その山賊が崩れ落ちた後だった。

「まず、一人」

「――て、てめぇ!!」

後ろにいた一人が激高し手斧を握り、突進するように迫る。

その瞬間にヒューイは腰に佩いた剣を抜刀する。

金属に近い、だが金属とは異なる奇妙な光沢を帯びた、鍔が無く柄と刃が一体化した奇妙なつくりの黒い両刃のバスタードソード。

バスタードソードは片手半剣といわれる両手剣と片手剣の中間にあたる剣で、その中でも刺突と斬撃の両方を行うことができる複合性能を持った剣だ。

その汎用性は極めて高いが、その汎用性と剣自体の独特な重心バランス故に厳しい訓練なしでは扱うことすらできない剣としても有名である。

故に、そのバスタードソードを好んで使ってるヒューイの技量も推して知るべし、といったところか。

彼に向かって横なぎに振るわれたその斧を、右手に持った剣で弾きいなし、自由な左手で掌底を相手の顎に叩きこむ。

直接脳を揺さぶられ脳震盪を起こし、ふらつく山賊のみぞおちに、深々と切っ先が差し込まれた。

「二人目」

二人目を殺した瞬間、奥に控えていた三人目が弓を引き絞り、矢を放つ。

「――!」

放たれた矢が目深に被ったフードの裾を掠めて飛び、端がめくれ上がりヒューイの顔が山賊たちにあらわになる。

「なんだてめぇ!?」

彼の頭の上半分を覆うメット状の仮面を見て山賊たちに動揺が走る。

ソレは豪奢な装飾が施された儀礼用の仮面。そんなものをつけている人種はこの国では一つしかないのを山賊たちは知らない。

その人種とは古森人。寿命という概念がほぼ存在しない森人の上位種にして、神に等しき者たち。只人と接する際には仮面を被り、その素顔を晒すことが無い。そしてその全てが有り余る時間を武の研鑽に費やした達人であることなど、学のない山賊たちは知る由もない。

続けて放たれた二発目を刺したままの山賊の死体を盾にして防ぎ、盾にした死体で左手を隠す。
隠した左手で近くに倒れ伏した一人目の山賊の手から山刀を引き抜き、投擲。
投擲した山刀は、次の矢を番えようとしていた山賊の額に吸い込まれ、そのまま絶命させる。
「これで、三人だ」
慣性の法則に従って仰向けに倒れた三人目を見て、残り二人の反応は劇的だった。
「ひ、ひぃ！」
「な、なんだよ畜生!!」
そう言って、橋の反対側へ脱兎のごとく逃げ出した。
瞬く間に仲間三人が殺されたのだからその反応もやむなしと思われるが、ふとここでどうしようかという考えがヒューイの頭をよぎる。
無益な殺生は望まないから、このまま逃げてもらって全然構わない。だが、もしもこれ以上仲間がいて呼ばれてしまうと困る。
このまま二人を始末してしまった方がトータルとしてみると人数殺さずに済むのではないか。
そんなことを考えてしまった、その隙に奴らはとんでもないことを始めた。

「――あ、やべ」
逃げた二人はあろうことか橋の対岸でつり橋を支えるロープを切断しようとしていた。
それだけはまずいと、急いで奴らのもとへ走る。
――が、彼がたどり着くより先に片方のロープが切れた。
ガタンと橋が斜めに傾き、切り捨てた三人分の死体が谷底を流れる渓流に落ちてゆく。
ヒューイはバランスを崩し、咄嗟に剣を橋板に突き立て流れ落ちるのを防ぐ。
だがこれは悪手で、詰みだ。
こうなってしまったからには、再び走り出すことは叶わず、この後に待っているのは――。
「死ねや、仮面野郎！」
――とうとうもう片方のロープは切られ、橋が落ちる。
重力に従って落ちた橋は、彼を乗せたまま片側へ吸い寄せられていき、ヒューイを対岸の壁に叩きつける。
「がはっ！」
対岸に叩きつけられた俺はその衝撃をまともに受ける。その反動で刺した剣は抜け、

自由落下に身を任せることになる。
財布落とした上に、山賊に襲われ、挙句谷底に落ちるとか。本当についていない。
「――師匠にこの無様がばれたら殺されるな」
こうして彼は、谷底を流れる渓流にドポンと落ちたのであった。
……ｔｏ　ｂｅ　ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ

第一話「旅人と少女」（Ⅰ）

□■□

――■■、ねぇ■■！

誰かが、俺を呼んでいる。今の俺とは違う名前で俺を呼んでいる。ひどく懐かしい声だ。

――■■、もう朝だよ？

知っている、知っているんだが、もう少し寝かせてくれ。なんだか疲れているんだ。

――……、どりゃー!!

……わぶっ！　急に覆いかぶさって来るなよ！

――へへっ、おはよう■■

眼を開けるとそこにはいつも通りの彼女の笑顔があった。綺麗な赤い髪が朝日を反射してキラキラと輝いてる。

……おはよう。

そういって彼女の名前を口にしようとするが不思議と出てこない。

――どうしたの？

いや、何でもないよ。

だがそうはいったものの、こんな大切なことを忘れるなんておかしい。

そう思った瞬間、ふと冷たい風が頬を掠める。

そして気が付くと景色は一変していた。

刃のように鋭利な枝葉を伸ばす黒々とした木々が生い茂る森の中、吹きすさぶ吹雪が叩きつける中で俺は血まみれで雪の上にはいつくばっていた。

忘れもしない、故郷――黒剣の杜の光景だ。

「あなたには死ぬ権利はありません」

そして顔面を思いっきり蹴り飛ばされる。

消えた彼女の代わりに目の前にいたのは――師匠。

「さぁ、剣を構えなおしなさい」

俺はそこで剣を握っていたことに気付く。

自分を奮い立たせる為に大きく叫びながら、起き上がりと共に低い姿勢から突き上げるように刺突を首元に放つ。しかし、師匠はそれを軽く軸をズラすだけで躱し、カウンターとして剣の柄で俺の鳩尾を強く打ち付ける。

その衝撃で肺の空気が全て放出され、口の端から血の泡が吹き出る。そして二、三歩

程後ろに後ずさりまた地面にうずくまる。
剣を杖のように地面に突き刺して起き上ろうとするも、師匠はその剣に足払いを掛ける。
「剣は杖ではありません。貴方にはまだ剣に対する真摯さが足りません」
ばたりとまた地面にぶつかる俺に対して、師匠は冷酷に告げる。
「さぁ立ちなさい、ナナシ」
□■□
「!?」
そして、ヒューイは飛び起きた。心臓はバクバクと脈打ち、汗は止まらない。
今まで見たものが、夢だと認識するまでに数十秒を要した。
「ゆ、夢か……」
そう考えてほっとしたのもつかの間、今自分がいる場所に気が付く。
そこは掃除の行き届いた、質素ながらも綺麗に片付いた部屋だった。ヒューイはそこのベットに寝かせられていた。
「俺は確か、橋から落ちてそれで……」
そこまで考えたところでふと自分の頬に触れる。
「あ、仮面!?」

慌てて顔をぺたぺたと触って確認すると、そこにあるはずの仮面は確かに存在していた。そのことにほっと胸をなでおろす。

わざわざ助けてくれた人を口封じに……なんて後味の悪いことを考えずに済んで安心する。

――そう、助けられた。助けられたのだ。

そのことを思い至ったヒューイは助けてくれた人の人物像を探ろうと改めて部屋を見渡す。

部屋には自分が寝ていたベッドの他に、反対側にも同じベッドがある。二つのベッドの横には机や箪笥などの最低限の家具が二つずつ置いてあり、部屋の真ん中から対照的な配置をしていた。

この感じは、普通の家ではない。それでもって宿屋の部屋とも違う。

「しいて言うなら、寮室か？」

ヒューイは共同生活を送る部屋という印象を抱いた。

つまりこのことから把握できる人物像は――

「全くわからん」

さもありなん。

もともと半年前まで故郷である黒剣の杜しか知らなかったヒューイには、この少ない

情報から推察できるわけなかったのである。
その時、ガチャリと扉が開く音がして、咄嗟にヒューイは身構える。
視線の先にいたのは、荷物を抱えた十歳くらいの獣人の少女だった。
この辺では珍しいふわふわとした白い髪、翡翠色の丸い瞳、その容姿は幼いながらも整っており、あと十年もすれば、美しい女性に成長するであろうことが想像できる。身長はヒューイの胸より少し下くらいだろうか。服装は紺色のスカートに白いシャツといった質素だが質は悪くないものに思えた。
「あ、お兄さん目が覚めたのですか！」
少女はベッドから起き上がっていたヒューイを見てそう言った。
「あ、あぁ」
予想だにしなかった恩人？の姿に呆気に取られるヒューイ。
「お兄さんの着ていたモノは今乾かし終わったので持ってきたのです」
そう言った彼女が抱えている荷物の正体はヒューイが着ていた服だった。
そのことに気がついたヒューイは同時に今の自分が肌着姿であることにも気づく。
「申し訳ないのです。この教会には女の人しか住んでいないですので、男の人が着る物がそんなものしかなくて……」
「――ここは教会なのか？」

「なのです」
修道女たちが住み込みで働いているのなら、寮室に似た雰囲気があるのは納得だ。
「そうか、助けてくれてありがとう」
そう言うと少女は照れたようにはにかむ。
「いえ、マリアはお兄さんを見つけて皆んなに知らせただけですので」
この少女の名前はマリアというらしい。
「いや、それでも充分だよ」
見つけただけと彼女は言うが、濡れた服を着た男性を運ぶのは大の大人でも骨が折れる。
一人でなんとかしようとするのではなく、大人達を呼びに行ったマリアの判断は正しいと言えた。
そのことを考えて、年の割には聡い子なのだろうという印象をヒューイは抱いた。
「ありがとう。取り合えず着替えるから、着替え終わったら責任者のもとへ案内してくれ」
そういってヒューイは彼女から服を受け取り、着替える。
着替え終わったヒューイは、部屋にあった姿見の前に立ち、格好を整える。
その姿見に映っていたのは、若草色の外套を羽織った、身長百八十センチくらいの細

身の青年。外見年齢は十八歳くらいと思われるが、仮面によって顔の大部分が隠れている為、詳しい年齢感はわからない。仮面は儀礼用と思われる豪奢なもので顔の上半分と、森人特有のとがった耳を覆い隠すメット状のデザイン。外套の下の服装は白いＹシャツの上に上下黒を基調とした服を着ている。ただそれは普通の服ではなく、裏地に鋼色のスチールウルフ――黒剣の杜の固有種で、生半可な剣を弾き返すほど強靭な体毛を持つ狼――の毛を編み込んだ、いわば隠れた鎧だったりする。

つまり、いつものヒューイが映っていた。

「よし、こんなもんかな?」

そういって服の襟を正したヒューイは、マリアへ向き直る。

「じゃあ、案内頼めるかな」

「はいなのです!」

元気に返事をしたマリアに連れられて、ヒューイは部屋を後にする。

部屋を出て廊下を進んでいく二人は、ほどなくして大き目な扉の前につく。

「この時間なら、お姉さまは大体聖堂にいるのです」

「お姉さまっていうのがここで一番偉い人?」

「そうですね……もっとも、この教会にはマリアとお姉さましかいないのですが」

そういいながらマリアは扉を両手で開ける。

中はこじんまりとした木造の聖堂だった。
いかにも田舎の教会といった質素なつくりではあったものの、掃除はよく行き届いており、備品も高価なものはないが手入れが行き届いており、そこからきちんとした信仰心が垣間見れた。
聖堂の奥に鎮座するのは、この教会の信仰の対象である仮面をかぶった優しげな男性――森人の王である森王の像があった。
今のこの世界では神を祀る文化がない。神を祀るのは野蛮な前任者達の文化だからだ。
その代わりに各地で信仰されているのが森王ジューダスだ。森王ジューダスは四族同盟設立された当時から四人の王の内の一人として存在している古森人で、不死である古森人の中でも最も長命で神に限りなく近い。そして神とは違い実在してより良い治世という形で、人々に目に見える結果を出していることから神の代わりに信仰の対象となっている。彼を祀る教会自体はこの国全域にあるが、彼が直接治めるこの北方では特に信仰が強い。
ヒューイは、その森王の像の前で手を組んで祈りをささげている女性を見つけた。
修道服に身を包んだ美しい女性だ。
「お姉さま、お兄さんが目を覚ましたので連れてまいりました」

マリアの声に彼女がゆっくりと振り向き、紫水晶のような瞳がヒューイを映す。
「まぁ、旅人さん。無事目が覚めたようで何よりですわ」
彼女はそう微笑みながら言った。
「いえ、此方こそ助けていただいて感謝します」
ヒューイがお礼を述べると彼女はいえいえとかぶりを振る。
「私たちこそ、古森人の方を助けられて光栄ですわ」
ニコニコと笑顔でそう答える彼女に対してヒューイは少し苦い顔をする。
「やめてください、そういう貴族扱いは好きではありません」
古森人は森人の上位種であるから、森人達からはほかの種族社会での貴族と同等かそれ以上の扱いを受けることがままある。
黒剣の杜では自分以外に住んでいるのが姉と師匠のみだったため最下位カーストだったヒューイは、外の世界で自分がどういう扱いをされるかを旅立つまで知らなかった。
故にこういった扱いを受けることに酷く抵抗を感じるのだ。
「そうですか、わかりました。そこまで仰るならこれからは普通に接させていただきます」
「そうしてもらえると助かります」

その言葉を聞いてヒューイは少しホッとする。
「あぁ、そういえば自己紹介がまだでしたわね。私はセリア・H・ルークス、森人です。こちらが――」
彼女――セリアに促されてマリアは自分も自己紹介がまだだったことに気が付く。
「あ、マリアはマリア・ルークスなのです。獣人です」
「ん、ルークス？」
ここでヒューイは種族の異なる二人の苗字が同じことに気が付いた。
そもそも、種族ごとに名前の法則は違う。獣人は苗字にあたる部分が家名であるが、森人は出身地を表す。
だからこそ少し不自然を感じた。
「あぁ、ルークスはこの教会の名前で、元々は孤児院も併設していたのですよ」
「……なるほど」
つまり、この二人は孤児院時代から、ここにいたから種族は違えど同じ名前なのか。それなら家名と出身地が同じでも問題ないなとヒューイは思った。
さて、問題はここからである。
この流れからしてヒューイ自身も名乗らなくてはならないのだが、相手が森人である場合は少々面倒なことになるのが予想された。

しかし助けられた手前、偽名を使うのも憚られた為、仕方なしにヒューイは素直に名乗ることにした。

「ヒューイ・A・ブラックソードです」

その名前に――より正確ならばその苗字にセリアは反応した。

「ブラックソード？　貴方はあの〝聖域〟黒剣の杜出身なのですか!?」

ほーらやっぱりこうなったとヒューイ内心うんざりした。

〝聖域〟。それはこの世界に魔法というおとぎ話の中でしか存在しないと思われたモノが存在したとされる三つの証拠のうちの一つ。

普通の自然法則から逸脱した不可思議な現象が、まかり通る七つの場所のことである。その希少性と危険度から只人は決して踏み入ることができず、四族同盟に認められた管理者たる巫女と守り人だけが住むことを許される。

「まぁ、じゃあ旅人さんは守り人様なのですか！」

「い、いやまぁその見習いといいますか」

一応、ヒューイが旅に出た理由は、〝守り人の後継者になる修行の為〟というのが表向きの理由となっている。

「お姉さま、お兄さんは凄い人なんですか？」

「ええ、凄い方ですわよ！」

ヤッベェ、なんか盛り上がり始めたとヒューイは思い。
「だ、だからそういったのは……」
「あ、そうでしたわね」
そういって照れたようにセリアは笑う。どうやらセリア自身も堅苦しい性格ではないようだ。
「あぁ、そうだ。俺の荷物、あと剣はありますか？まさか――」
「いえ、剣はあります。ただ神聖な場所で武器をお預けするのは抵抗がありましてこちらで預からせていただいてます。なので後でお返しいたします。ただ――」
そこで言い淀んだことで、ヒューイは嫌な予感を感じた。
「あの、ごめんなさいです。お兄さんを見つけた時に鞄は見つけたのですが、その、中身は殆ど流されたみたいで……」
「……不幸だ。財布だけでなく荷物も無くすなんて」
ヒューイはがっくりと肩を落とした。
荷物だけ、財布だけならよかった。いや、よくはないがまだマシではあった。片方だけならまだすぐ旅を続行できたが、両方はさすがにつらい。
せめてお金を何とか工面しなければ。そうすればなんとか荷物も再購入して続けられるのだが。

「そうだ、冒険者組合！冒険者組合はありますか？」

この国には冒険者という職業がある。その名称こそこの国が未開拓だったころの名残でしかないが、彼らの存在は未だこの国にはなくてはならない存在だ。

彼らの業務は多岐にわたり、前任者達の残した遺跡などの探索などのその名に恥じぬものから、要人や商人の警護などの傭兵まがいのことや田畑の収穫の手伝いまで、言ってしまえば戦える何でも屋だ。

特別な事情がなければ組合に申請すれば誰でもなれる上、仕事を選ばなければ食うには困らない稼ぎを得られて、かつ土地に縛られない故にこの国では大変重宝されている。

ヒューイは以前大きな街に立ち寄った際に、旅費を稼ぐのと身分証の発行のために冒険者として組合に登録したため、ここに組合があればそこから稼ぐことができると踏んだのである。

しかし、現実は非常である。

「あの、お兄さん。この村にはそんなのないのです」

「――村？ここは村なのか？」

「ハイです。冒険者組合がある街へは、馬車で最低三日かかるのです」

「……みっか」

残念なことにその馬車賃すらも今のヒューイには、ない。
「詰んだんじゃないか、これ？」
不幸は続くよどこまでも。
いまさらながら師匠の言葉がヒューイの脳裏を過る。
『貴方はどうしようもない愚図で間抜けなのですから、どうしようもなくなったらさっさと命を投げ出すのがよろしい。さすれば来世は虫けらとして、虫けら並みの幸福を得られるでしょう』
……あれ、思い出す言葉間違えてない？そうヒューイは思ったが、師匠の言葉は辛辣で大体ヒューイに死ねと言っているようなものだったので、こういった危機を回避するアドバイス的なのは皆無であった。
そんな中、セリアがヒューイに救いの手を差し伸べる。
「あの、ヒューイさんがよろしければ、しばらくこの教会に滞在しませんか？」
「え、でもお金が――」
「大丈夫です。もともと困っている人を助けるのが教会ですから」
そういって天使のように微笑むセリアに対して、拝みそうになるヒューイ。
「旅費についても心配ないと思います」
「え、ほんとですか!?」

「もうすぐこの村で、秋の収穫感謝祭が行われるのです。そこで村の人たちの出店する店を手伝うか、あるいはヒューイさん自身が出店すれば、片道分の旅費くらいはたまると思います」

そう、ここで旅費を全部稼ぐ必要はない。ちゃんと稼げる大きな街に行くための馬車賃さえ捻出できれば何とかなるのだ。

「そうですか！ありがとうございます！」

「あ、でも泊めてあげるかわりに教会の手伝いとかもお願いしますね？」

「それはもちろんです。大丈夫、そういうのは得意です」

「得意……？」

一般的な古森人のイメージからだいぶかけ離れたことをいうヒューイに困惑した表情をするセリア。

上位種たる古森人は基本崇め奉られている為、現世のことには疎い印象が強い。

セリア自身は半ば冗談のつもりで言ったのだが、こうもいい返事をされるとは思っていなかった。

実際のところ、ヒューイは修行中は、家事全般を師匠に任されて居た――もとい押し付けられていた為に、どれもそれ相応にできる。

古森人は現世に疎いという言葉は、ヒューイには別の意味でよく当てはまる。

黒剣の杜しか知らずに育った彼は、旅立って半年経った今でもだいぶ世間知らずだったのである。

こうして感謝祭まで――一週間の間の共同生活が幕を開けた。

森人の修道女と獣人の少女、そして古森人の旅人という変わった三人の過ごすこの一週間が、この四族世界の運命の歯車を回す最初のキッカケになるとは、この時はまだ誰も――この世を去った神々すら知らない。

……ｔｏ　ｂｅ　ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ

第二話「旅人と少女」（Ⅱ）

□■□

ヒューイの朝は早い。

陽刻の一（午前四時）に起床。使える部屋がないという理由で同室となったマリアを起こさないように着替えて、そっと部屋を出る。

そのまま返してもらった剣を持って外に出て、早朝特有の静謐な空気を思いっきり吸い込む。朝の空気の清々しさは故郷もここも変わらないなと、ヒューイはひとりごちる。

教会の裏手にまわり、小さな庭に着くと、そこで井戸から引いた井戸水でこっそり仮面を外して、手早く顔を洗いまた仮面をかぶる。そのあと軽くストレッチをし、そしてトレーニングを始める。

腕立てと腹筋、屈伸運動などの基本的なモノを各二百回。師匠に弟子入りしてからどんな時も欠かさずに行ってきた習慣だ。

『人は日々衰えるものです。故に日々鍛えることが重要です』とは師匠の弁。またそのあとに『貴方は常人以下の虫なのですから、それ以上に努力しないと虫けら並みどこ

ろかそれ以下の芥になりますよ』と続くのも師匠の弁。含蓄のある言葉と罵倒は基本セットで吐かれているのが当時の日常であった。

ヒューイはそれを不器用な師匠なりの愛の鞭だととらえていたが、実際はその鞭に愛など微塵もなかったことを彼は知らない。

そうやって各種トレーニングを完遂した後は、愛剣を抜刀しての素振りと型の確認。これらを更に二百回行い、戦いがなくても、その技を身体に染み込ませる。

そうすることで、ようやく日課が終わるのだ。

そうこうしているとヒューイの鼻をいい匂いが掠める。朝食の匂いだ。

時刻は陽刻の三になっていた。

「よし、マリアを起こしてご飯にしますか」

部屋に戻ると、まだ少女は心地よさげにまどろんでいた。

これを起こすのは正直気が引けたが、この情けのせいで彼女が朝食を食べ損ねることのほうが悲劇なのでここは心を鬼にして起こす。

まぁ、鬼にするといってもたたき起こすのはかわいそうなので、優しくゆすり起こすことしかヒューイにはできないのだが。

「マリア、朝だよ」

「――ん、んにゅう」

そういって寝ぼけながら身を起こしたマリアにヒューイは濡れた手ぬぐいを渡す。
ここに来る前に庭の冷たい井戸水に浸してきたものだ。
「これで顔を拭いて、着替えたら来なさい。先に行ってるから」
「ん、わかったのです」
未だうつらうつらとしているマリアをほほえましく思いながらも部屋を後にし、食堂に移動する。
食堂の扉を開けると、ふわりとスープの匂いが香った。
「あ、おはようございます」
「おはようございます、セリアさん」
食堂ではセリアさんが鍋をかき混ぜていた。
ウィンプルを取ったセリアさんは、波打つ金の髪をなびかせながら料理を用意していた。
すでに食卓にはパン、今が旬の野菜を使ったサラダが人数分並べられていた。
「何か手伝うことはありますか?」
「いえ、特には――あ、そうだマリアを起こして来てもらえます?」
「あ、それはもう――」
そんなことを話していると、ヒューイの後ろからふらりとマリアが現れた。

「いい匂いがするのです」
「マリア、おはようございます」
「おはようです、お姉さま」
　そして三人で食卓を囲む。
「それでは、森王様の治世に感謝して、いただきます」
「「いただきます」」
　スープを一口飲むと野菜のうまみがゆっくりと広がる。具はシンプルにキャベツときのこだけだが、きのこがいい味をだしていてなかなかうまい。
「ヒューイさん、今日はどちらに？」
　セリアさんがスープを一口飲んでからそう問う。
「陽刻の八までに薪割りを終わらせて、それからマリアと――」
「マリアが村についていくのです！」
　ヒューイの言葉を、隣に座るマリアが笑顔で遮る。
　マリアにとっては悪気のあった行動ではなかったものの、セリアは少々ご立腹だ。
「マリア、人の話を遮るものではありません」
「ご、ごめんなさいなのです」
　マリアは一転しょんぼりとした声と表情でヒューイに答えた。

「いや、気にしていないから大丈夫だよ」
ヒューイは優しくマリアの頭を撫でる。
マリアを見ているとヒューイは微笑ましい気分になる。姉はもしかしたらこんな気分で自分を見ていたのかもしれないと思う。師匠は――、うん。
自分より年下の少女と向き合うのはこれが初めてのはずだが、とても懐かしい気持ちになる。これはもしかしたら――
（――妹とか、いたのかもしれないな）
内心で、今は遠い彼方にある自身の記憶に思いをはせる。
故郷から旅立ってから、あまり考えなくなった――大変で考える暇がなかったそんなことが、今脳裏を過るのはそれだけヒューイがリラックスしているということか。
今この瞬間をヒューイは楽しむことにして、朝食を食べ進めた。
■□■
陽刻の九になり、薪割りを終えたヒューイは、マリアとともに村を訪れた。
この村は林業が中心のようで、あちこちで赤い実をつけた木々がある畑が見える。
教会は村はずれにあり、ヒューイは今日までは教会の中での仕事しかしてこなかった為、村人との交流は今日が初めてである。
この国の北部にあるこの村は、北部西側にあるようで、周りにはこの村のような小規

模な村々が点在しているだけのようだ。冒険者組合があるような大きな街の最寄が北都アルタイルだというのがまだ幸運か。

この国には四つの首都とその中央にある大都市カノープスがあり、それらを中心に発展している。

とりあえずのヒューイの目的地が北部の首都である北都アルタイルだった為、道筋的にはロスはあまりない。

そのことを知ったヒューイが、こっそりガッツポーズを取ったのも三日前の話。

「あ、おじさん。お久しぶりなのです！」

「おう、教会の嬢ちゃんじゃねぇか」

最初にあった村人は、収穫作業の休憩中だった体格のいい獣人のおっちゃんだった。

「お兄さん、この方がライオネルさんといって、お兄さんを教会まで運んでくれたのです」

「あ、そうですか。その節は助けていただいてありがとうございます」

「あぁ、この仮面のあんちゃんはあの時の奴か！」

そういってライオネルはバンバンとヒューイの背をたたく。

ある程度鍛えているとはいっても、体躯では劣っているヒューイはそれだけでつんのめりそうになる。

「それにしたって、変な仮面してンな」
「これは外せない事情がありまして……」
「まぁな、この多種族社会じゃどんな事情があったって不思議じゃないからな」
この国は、いわゆる多種族社会で成り立っている。鋭敏な五感を持つ獣人、器用な鉱人、長命な森人、屈強な竜人の四種族だ。
四種族に対応する四人の王が東西南北の四つの領土を分割統治し、国自体の方針は四人で集まって決めるという治世を行っている。
「ライオネルさん、なにか手伝えることってないのですか？」
そうやってマリアがライオネルに問うと、彼は腕組みをしてうなる。
「収穫期なんだから、人手がいくらあっても足りないんだがな――、あ」
「どうしましたか？」
「いや、あんちゃんは冒険者だろ？」
ライオネルはそう言ってヒューイの腰に佩いた剣を指す。
「ランクはいくらだ？」
冒険者にはランク制度がある。
大きく分けて金銀銅の三種、細分化すると十五等級。最下位は銅の五等級で最高位が金の一等級だ。

「銅の三等級です」
「う～ん、銅の三かぁ」
　ライオネルはそういって首をひねる。
　半年前に登録したにしてはヒューイの銅の三等級というのは十分高い値なのだが、そんなことは知らないライオネルは、ヒューイを駆け出し冒険者ととらえた。
「いやなに、実はここから少しした山道に山賊が居ついているようでな」
「――ほう？」
　ヒューイの脳裏には先日襲われた五人組が過っていた。
「収穫した荷を売るために来る行商も来れないし、近隣の村から感謝祭目当てで来る観光客も来れないしで、ほとほと困っていたんだが」
「なるほどそいつ等を何とかすればいいんですね」
「いやいやいや!!」
　そこでライオネルは慌ててかぶりを振る。
「仲間がいるならともかく、あんちゃん一人であいつ等は無謀だって」
「そうですか？」
「――古森人が世間知らずってのは本当みたいだな」
「失敬な。じゃあこうしましょうか――」

こうして今晩の約束を取り付け、ライオネルのもとを後にする。

「お兄さん、あれでよかったのですか？」

「ん、大丈夫だよ」

自身のことを心配してくれたマリアの頭をヒューイはくしゃくしゃと撫でた。

……ｔｏ　ｂｅ　ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ

第三話「旅人と少女」（Ⅲ）

□■□

時刻は陰刻の二（午後八時）。

ヒューイとライオネルを含めた村の若い衆は、宵闇に紛れて山賊たちが潜んでいるであろう山道付近に来ていた。

「――で、あんちゃんなんでこんな時間に？」

「ライオネルさん、やつらが潜んでいるのはこのあたりなんですよね」

ヒューイはライオネルの問いには答えず、そう聞き返す。

「あぁ、このあたりで多発してっからな」

「じゃあ、問題ないですね。山賊の住処をあぶりだすのは」

「あん？それは――あ」

そこでライオネルは遠くの岩場の陰から明かりが漏れていることに気が付いた。

「夜なら明かりつけないわけにはいかないですよね」

あっさり隠れ家をあぶり出したヒューイにライオネル達は唖然とする。

「なんでこんな簡単なことに俺達は気が付かなかったんだ」

「そりゃ、山賊が潜む山道に夜行こうとする人なんかいないでしょう」
確かに。そんな声が若い衆から上がる。
「でもうかつなのは違いないですね」
「そりゃどうしてだ？」
ライオネルの問いにヒューイはあっさりとこう答える。
「この時間に山賊を探そうとする奴なんて、自分らを狩ろうって輩だけだというのにです」
その恐ろしいまでのヒューイの冷静な思考にライオネルは少し身震いする。
この仮面の青年は、本当に駆け出し冒険者なのかと疑念が脳裏をかすめる。
「じゃあ、あそこまで行きますよ」
そうして道すがらで、簡単に作戦の説明をするヒューイ。
「ライオネルさんは光源を頼りにほかの出口を探してください」
「了解だ。で、探したらどうすればいい？」
「探し出した出入口から、合図したら同時に煙を焚いて流し込んでください。それで一つの出口に誘導します」
「誘導してどうするんだ？」
「その出口で待ってた俺が、殺すか戦闘不能にするかします。若い衆は俺が取りこぼし

た奴を捕まえてください」
「――あんちゃん、真顔でおっそろしいこと言うな」
「そうですかね？」
黒剣の杜では、不法な密猟者に対しては皆殺しという厳しい制裁が当たり前だった。その為、ヒューイは無法者に対しては殺すことを厭わない。
ただ、命をむやみに散らせるものではないこともわかってはいるから、成るべくなら殺したくないという気持ちもあるが。
「さて、それじゃあ指示通りにお願いします」
「おう」
こうして隠れ家周囲に到着したヒューイたちは、そそくさと配置につく。
岩場の洞窟を利用した隠れ家の出入口は三つ。裏に隠れるようにあったのが二つ、表に大きなのが一つ。
剣を振り回すことを考えた結果、ヒューイたちは表の出入り口に誘導することに決めた。
そして合図が下りる。
さぁ、山賊狩りの始まりだ。

■□■

まず最初に異変に気が付いたのは頭目である鉱人の男だった。
男性の平均身長が百五十センチの鉱人にしては大柄（それでも百七十センチはない）なその男の鼻に、焦げ臭いにおいがした。
「おい、なんだこの匂いは？」
「え、お頭なにを――ごげ臭っ!?」
ともに飯を囲んでいた数人がざわめきだす。
「落ち着けお前ら！　まずは原因を――」
事態を収拾するために声を張り上げる頭目。しかしその声を奥から来た仲間の言葉が遮る。
「お頭大変でさぁ、奥から煙が!!」
タイミングが悪い、と頭目は内心舌打ちをする。
「お前らいったん外に出るぞ、蒸し焼きにされちゃかなわねぇからな！」
そういってぞろぞろと出口を目指す。
そして最初に出口から外に出た一人の男が唐突に消えた。
「――あん？」
異変はそれだけではない。その男が消えた場所に別な男が立っている。
フードをかぶったその男の顔には白い仮面が、隠れ家の明かりに照らされて不気味に

光っていた。

そして消えたと思っていた仲間の男。彼は消えてなどいなかった。

仮面の男のその足元、そこに血を流し倒れ伏していた。仮面の男の手には無論、血に濡れた刃が――。

その時点で、彼らの反応は迅速だった。

「てめぇ何者だ！」

頭目の声と同時にその場にいた全員が武器を構え、近い仲間から仮面の男に突貫していく。

仮面の男――ヒューイとの実力差も知らずに。

□■□

ヒューイは自ら先手を打たない。全てをカウンターで仕留めるつもりだからだ。

一人目の男が鉈を持つ手を振り上げると、その腕ごとヒューイは切り落とし、そのまま流れるような円運動で剣の柄で人中（鼻と口の間。人体の急所）を突き砕く。

その動きのまま二人目の攻撃をいなし、背後に回り込むと足の腱に向かって剣をふるい、それを切断。立てなくなり前のめりに倒れる彼の首を後ろから空いている片手でつかみ、続こうとした三人目に向かって投げ飛ばす。投げ飛ばされた仲間を受け止めた三人目は、手に持った槍をふるうことができずにいるところを、ヒューイが剣の腹で脳天

をカチ割って黙らせる。
瞬く間に三人を仕留めたヒューイを見て、山賊たちは二人がかりで襲い掛かっていく。
一人がナイフを持って首を狙おうと右から近づき、もう一人は反対側から斧を振りかぶる。
ナイフを持った男を、ヒューイは右手に持った剣で空を切りはらい牽制し、その隙に左手で腰から鞘を抜き、鞘で斧を持った男の手を打ち据える。その男が斧を取りこぼしたその時に、牽制に使ったその動きそのままに右手の剣で太ももを浅く切りつけ姿勢を崩させ、位置が低くなった顎にもう一度鞘を叩きつけ意識を刈りとる。
残ったナイフの男はその動きに動揺し一瞬動きが止まる。それはヒューイには致命的な隙に見えた。がら空きのみぞおちに鞘を突き放ち黙らせた。
そこまでやって残りの山賊たちの動きが止まる。
一様にその表情から読み取れるのは怯えの感情だ。
短期間に無傷で五人もの仲間を仕留めた事に加え、仮面で表情が見えないことが不気味さに拍車をかけて山賊たちに威圧感をかける。
山賊たちはじりじりとヒューイを囲んだまま後退を始めるが、背後には煙。
彼らの額に汗がにじみ始めたその時、ヒューイが初めて口を開く。

「武器を捨てて投降して下さい。しなかった場合、次の人からは命を取ります」
「な!?」
山賊たちの間に動揺が走る。
「何言っていやがる！お前はもう仲間を――」
そこまで言って山賊たちは気づく。仲間は皆、まだ死んでいないということに。
最初に刺されて倒れた仲間ですら、急所を外して刺されたからか、まだ息がある。
――そう、ヒューイはまだ手加減していたのだ。
この瞬くような短い時間で、丁寧に、細心の注意を払って殺さないでいたのだ。
それほどまでの、実力の差。
数の利すら物ともしない、圧倒的な個の実力。
それを見せつけられて、彼らの心はまさしく折れかけていた。
彼らは一塁の望みをかけて、自分らの頭目を見る。
自分たちの信じた、ついてきた頭目なら何とかしてくれると信じて。
その頭目は、目の前のヒューイを見据えて、こういった。
「わかった、投降する」
山賊たちの間に失望の色が広がる。
「ちっ、あんな依頼受けんじゃなかったなぁ」

そういって右手に持った大斧を地面に落とし、頭目はヒューイに近づく。
そして両手をヒューイに差し出す――ふりをして思いっきり彼を殴りつける！
頭目は、圧倒的な実力差を目の当たりにしてもあきらめてはいなかった。
不意打ちでヒューイを仕留めようとしたのだ。
しかし現実は――ヒューイは非情だった。
体幹の軸をずらすだけの最低限の動きで迫りくる拳を躱し、その腕に沿って鞘を握りしめた拳を頭目の顔面に叩き込む――クロスカウンターだ。
カウンターをまともに食らってよろめく頭目の顎に、半月を描くように蹴りが放たれる。
奇麗に顎に吸い込まれた蹴りのあと、反対側の角度から鞘による一撃がまた顎をとらえる。
蹴りで脳震盪を起こした頭目は、鞘の一撃で完全に意識を刈り取られ、白目をむいて地面に崩れ落ちる。
そうして伏した頭目を見下ろしてヒューイは残った山賊たちに問う。
「まだやる？」

■□■

そのあとは比較的スムーズだった。
頭目があっさりやられたあと、残った数人はすぐに武装放棄した。
それもそうだ。頼みの綱の頭目があっさりやられたのだから、心が早々に折れたのだ。
そのあとは村の若い衆が持ってきた縄などで拘束して、村に連行され、空き倉庫にぶち込まれることになる。
一仕事終えたヒューイは隠れ家の外で、岩の上に腰掛けその様子をボケっと眺めていた。
そんなヒューイの元へライオネルが近づいていく。
「――いや、まさかあんちゃん一人で何とかしちまうとはな、正直見くびってたよ」
「どうも」
ヒューイがライオネルの声にそっけなく答えるのは、別に拗ねているからではない。
先ほど頭目が言った言葉が引っかかっていて、それについて考えていたからだ。
『ちっ、あんな依頼受けんじゃなかったなぁ』
依頼。そう依頼だ。
ヒューイの聞き間違いでなければ、彼は依頼といったんだ。
その言葉が事実なら、彼らは何者かの頼みでここを根城に山賊業をやっていたことに

なる。

それはいったい誰で、何の目的があったんだろうか。ヒューイはそんなことを考えていたのだ。

「――確かに、見事だった!!」

突然、ライオネルのいた方とは反対側から声をかけられ、振り向く。

そこには巌のような男が立っていた。

身長は２ｍ近く、体重もヒューイとは比べ物ならないほどありそうな巨躯。しかし無駄な脂肪など欠片もないほど鍛え上げられた筋肉が、機動性を重視した皮鎧の上からでもよく見て取れた。武器らしい武器は帯刀していないが、その代わりに業物とわかる左右でデザインの異なる金属製の籠手を身に着けている。

しかし何よりも人目を引くのは、側頭部から伸びた一対の角。

その特徴を持つ種族は一つしかない。――竜人だ。

四種族中最も屈強で、戦闘に適した種族である竜人。その存在感は、ただの村人では収まるはずもない。

「誰だ、あんた？　若い衆の中にはいなかったよな？」

ヒューイがその竜人に問うと、彼は笑いながらこう返した。

「いや済まない。実はこういう者でな――」

そう言って首元から金属製のダグを取り出す。そのタグは、月光を反射して銀色に輝いていた。

「――銀等級の冒険者か」

そのタグは冒険者組合が発行している身分証だ。色と名前と同時に刻まれた数字で等級を示す。

「こう見えて銀の一等級なんだがな」

「一流じゃねぇか」

その事実にライオネルは驚きを隠せない。

一般的に銀等級になるにはそれ相応の場数を踏まなくてはならず、そのタグの輝きはベテランの証といえた。

基本、国家規模の有事などに投入される金等級と違い、普通のヒトが頼れる最大級の存在――それが銀の一等級だといえた。

それが、いきなり現れれば、誰だって驚く――俗世に疎いヒューイ以外は。

「その一流冒険者がどうしてこんなところに？」

「いやなに、北都の組合でこの辺の山賊退治の依頼が張り出されていたんで、オレが受けたのよ。そしたら――」

竜人は視線をヒューイに向ける。

「あぁ、仕事取っちゃったか。ごめん」
ヒューイはそう言って素直に頭を下げる。
「いいんだ。こういうのは早い者勝ちだろ？」
「そう言ってもらえると助かる」
そしてヒューイはホッと息を吐く。
もしかして因縁つけられると思っていたので、いいヒトそうでほっとしたのだ。
「ところでお前は、何等級だ？」
「ん？」
「あの動き、只者ではないだろう？　まさか金？」
そう聞き返す竜人に対して、ヒューイはやや申し訳なさそうにその期待を裏切る。
「残念ながら、銅の三等級だ」
「嘘つけ！　お前みたいな銅等級がいるか!!」
ところがどっこい、それが居てしまったのだ。
「……ん」
そういってヒューイが取り出したのは鈍い輝きを放つ銅色のタグ。そのタグにはきっちり三という数字とヒューイの名前が刻まれていた。
「まじか……」

唖然とする竜人に、ヒューイの背後でライオネルがうんうんとうなずく。
「――いや組合も皆、銅の五からスタートじゃなくて、実力者はそれ相応の等級からのスタートにすりゃあいいのに」
「組合にも考えがあるんだろ」
確かに、組合にもノウハウを学ばせ生存率を上げるためという理由はある。
しかし、もしヒューイが師匠からの紹介状なりなんなりを持って組合に行っていれば結果はたぶん違っていたであろうことは、無論この場にいる誰も知らない。
「お、そういえば自己紹介がまだだったな」
そういって竜人は、ヒューイに手を差し出す。
「ギム・ギュネル・ガスだ。ギムと呼んでくれ」
「ヒューイだ、よろしく」
「そちらの村には感謝祭目当てでしばらく滞在しようと思う。機会があったら是非手合わせを願おう」
そういって両者は握手を交わした。
……ｔｏ　ｂｅ　ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ

第四話「旅人と少女」（Ⅳ）

□■□

「それで、山賊の人たちはどうなったんですか？」

翌日、二人で山菜を取りに山へ向かう途中でマリアに昨日のあらましを聞かせていた。

「あぁ、きちんと手当して空き倉庫の中で拘束している。感謝祭が終わったらギムが馬車を借りて北都の組合に届ける手はずになった」

「それじゃあ、お兄さんもその馬車に乗って行くのですか？」

「……まぁ、そうなるな」

更に言えば、本来のランクでは受注できなかった山賊退治の依頼を、ギムとパーティを組んで討伐したということにして、依頼金の半分をヒューイが受け取ることになったので北都まで行った後の資金問題もある程度解決したのである。

その後、無一文なことを話したところ、前金としてギムがいくらかお金を融通してくれたため、ヒューイが抱えていた問題の大半は解決したと思ってもいい。

そして山賊退治から一晩明けた今日、ヒューイはある決断を下した。

ギムから融通してもらったお金を元手に、自身も露店を出して感謝祭に参加することを。

その露店でヒューイが売ろうとしているのは――

「まさか、お兄さんがご飯作れるとは思わなかったのです」

「何を隠そう、師匠からは『……まぁ、食べられなくはない』という最大級の賛辞をいただいた程の腕前だからな」

「……それ、褒められているんですか？」

――そう、料理だ。

感謝祭では、たくさんのおいしいものが出るとはマリアの弁。ならばそれに便乗しようというのだ。

ヒューイはこう見えても創作料理に手を出せるくらいには熟練者だ。エルフないしヒューイ独自の料理は、物珍しさだけでも人が呼べるのではと踏んだのだ。

それにはまず食材の確保。まずはタダで手に入る野草に目を付けた。

地元の山に疎いヒューイは案内役をマリアに頼みここまでやってきた。無論、マリアへの報酬は試作したおいしいご飯だ。

「事情を話したらセリアさんとライオネルさんが最低限の調理具を貸してくれるっていうし、ここの人たちが親切で助かった」

「えへん、なのです」

ヒューイは正直、自分が落ち延びたのがこの村で――セリアたちに助けられて本当に良かったと思っていた。

比較的平和だとしてもこのご時世、〝村〟というのは閉鎖的なイメージが強くあった。事実、そういった村もこの半年間でたくさんヒューイは見てきた。

人の出入りが多い大きな街と比べて、出入りの少ない村は顔なじみだけで回っていて、かつ生活が苦しかった頃の名残か、人々の心に他者を受け入れる余裕がない。

そんな中でこの村は、驚くほどヒューイに優しい。――仮面をつけた怪しいよそ者であるはずのヒューイに。

それはこの村がもともと持っていた気質かもしれないが、ヒューイにはセリアとマリアの存在が大きいように感じていた。

この数日暮らしていて分かったが、彼女らがこの村の精神的支柱であると思った。

誰もかれもが、如何にも怪しげな風体のヒューイを『セリアさんとこに世話になっている人』だから、『マリアがこんなになついている』のだからと警戒を解いて接してくれている。

ライオネルと初めて会った時だってそうだ。あの時マリアがそばにいた意味は非常に大きい。

マリアに信用されていたからこそライオネルに信用され、ライオネルにも信用されたからこそ山賊討伐の時にあれだけの村人が協力してくれたのだろう。
そう考えると、セリアには頭が下がる思いだとヒューイは思った。
「お兄さん、ついたのです」
「そうか、ありがとうな」
そんなことを考えてるうちに、山菜の取れるポイントに到着したようだ。
「この辺でとれる野草には無知だから、マリア先生、ご教授お願いします」
ヒューイが知っている野草とは、〝聖域〟である黒剣の杜で独自の進化を遂げた固有種ばかりなので、他の地域では参考にならない。
その為、山菜探しはマリアが頼みとなった。
「うむ、任されたのです」
ヒューイの言葉にマリアが調子よく答えて、さっそく山菜集めが始まった。
「マリア、これは？」
ギザギザの葉をはやした野草をブチブチと取ると、マリアに問う。
「それは野生の北方人参ですね。根っこごとお願いします」
そんな感じで採取を進める。
「こっちのは？」

「えと、甘味ハンゴンソウというのです。旬じゃないのです」
「これは？」
「それはわかんないのでやめときましょう」
「こっちの変なのは？」
「秋ゼンマイもどきです。マリアは苦くて嫌いなのです」
「じゃあこれは採取っと」
「!?」
そうやって採取を始めること約二刻、二人の籠の中にはなかなかの量の山菜が取れた。
「じゃあ、暗くなる前に帰るか」
「ハイなので――」
そこまで行ったところで、がさりと近くの草むらで音がした。
「ひっ」
小さく悲鳴を上げたマリアをかばって、ヒューイは一歩前に出る。
今はいわば実りの秋。冬眠前の猛獣は今こそ活発に活動している。
熊程度なら何とかなるが、万が一にもマリアに何かあってはいけない。
細心の注意を払って、草むらを注視すると、そこから現れたのは大きな猪――

「……あん、ヒューイじゃねえか」
　――を担いだギムであった。
　見知った顔を見て一気に緊張が弛緩する。
「なんだはこっちのセリフだ。一体こんなところで一人で何してるんだよ」
「――まぁ、ちょっとな。それよりほら見ろ！」
　うまい具合に質問をはぐらかしたギムは、大猪を指す。
「突然飛び出してきたんでついでに狩ったんだが、凄い大物だろ？」
　今夜は猪鍋だな、といって笑うギム。
　しかし確かに凄い大物ではある。マリアよりも一回り大きい猪なんて早々見ることはできないだろう。
　この獲物を苦も無く仕留めることのできるギムの実力は、推して知るべしといったところか。
「……でだ。正直道に迷っちまっていたんで助かった。一緒に帰っていいか？」
　そんな実力者が間抜けなことを言っているさまに更に脱力するヒューイ。
「いいよ、丁度俺たちも帰るところだったし」
「――ところで、そっちのちっこいのは？」
　ちっこいの呼ばわりされたマリアはムスっとふくれてそっぽを向く。

「俺がお世話になっている教会の子のマリアだ」
むくれたマリアに代わってヒューイがマリアを紹介する。
「そうか、オレはギムだ。よろしくな！」
そういってギムはずんずん近づいてきて、マリアの頭をその大きな手でわしわしと乱雑に撫でる。
「や、やめるのですぅ！」
「おいこら、やめてやれよ」
全力で嫌がるマリアだが力の差でギムを振り払えずにいて、流石にやりすぎだと思ったヒューイが間に入る。
ようやくわしゃわしゃ攻撃から解放されたアリアは、素早くヒューイの陰に隠れてフシャーと威嚇する。
「――なんかお前、嫌われてるぞ？」
「そういうお前は、ずいぶんとまぁ気にいられたな」
そこでヒューイはふと疑問に思う。何故自分は短期間でこんなに好かれたのだろうか？
第一印象は、川辺に打ち捨てられた姿だからいいわけないし、その後だって特別何かした覚えはヒューイにはなかった。

実際のところはそうではなっかったが、ヒューイ自身には自覚は丸でない。
結果、その結論は短絡的なところに収まった。
「お前の顔が怖いだけじゃないか？」
「言ったなてめぇ！」
そう言ってじゃれあいながら三人は家路を急ぐ。
思えば、こんなに人と触れ合ったのは故郷以来かもしれないとヒューイは感じた。
そう思うと、ヒューイ自身は人と触れ合うのが好きなのかもしれない。〝目的〟を果たしたら、そういった職業に就くのもありだなとヒューイは感じた。
――そう〝目的〟だ。ヒューイは改めて自身が旅に出た理由を再認する。たった四日いただけで、この暖かな陽だまりに埋没したい衝動が沸き上がってはいるが、〝目的〟がその暖かな心を急激に冷やし、衝動にストップをかける。
この陽だまりに自分が居られるのはあと四日。その間にやれるだけのことは――恩は返さねばとヒューイは心に刻むのであった。
……to be continued

第五話「ヒューイの料理」

陽刻の十三（午後四時）、セリアが外出先から教会に帰宅すると食堂の方から香ばしい匂いが漂ってきた。

「――まぁ、いい匂い」

荷物を自室に置いたセリアはさっそく食堂の扉を開く。

そこではキッチンに立つ仮面の青年――ヒューイと、その手元をキラキラした瞳で見つめる獣人の少女――マリアの姿があった。

「いい匂いですね、どんな料理を作っているのですか？」

その問でようやくセリアの帰宅に気が付いた二人は同時に振り替える。

「あ、お姉さまお帰りなさい」

「お帰りなさい。今、露店で出す料理を試作しているところです」

そういえば今日の朝にそんな話をしたことをセリアは思い出した。

「今できたところなんで、よかったら味見をどうぞ」

そういってヒューイが皿に載せてセリアに差し出したのは、セリアの見たことのない

小麦色の料理だった。
小さく切った野菜や山菜をまとめて一塊にした後に、油で揚げたのだろうと思われた。
「少し塩をふってあるので、食べてみてください」
「それでは、いただきます」
一口ほおばると、サクサクとした小気味の良い食感とともに独特な山菜の香りが鼻をすり抜ける。そして、噛めば噛むほど野菜のうまみが口いっぱいに広がった。
「――これは、おいしいですね」
「ありがとうございます」
「お姉さま、これマリアも手伝って集めたのですよ」
マリアがはしゃいでセリアに微笑ましい報告をする。
「そう、よく頑張りましたね」
「えへへ」
そういってセリアは、マリアのふわふわとした髪を優しくなでる。
「あ、あとこれもうひとつあります」
そういって今度は楕円形の小麦色の塊だった。
外見では何がどういう風に調理したのかがわからない料理だった。

「こ、これは？」
流石のセリアも少ししり込みする。
この料理もまた、セリアの知らないモノだった。
「お姉さま、お姉さま！　これはすっごくおいしかったのです!!」
「……本当ですか？」
「ホントーなのです！」
セリアは、このマリアのキラキラした目を信じることにして、一思いにかぶりついた。
するとどうだろうか、かぶりついた瞬間にじゅわっと肉汁が染み出した。肉汁たっぷりのジューシーさもあるが、シャキシャキとした小気味いい食感もある。
――おいしい。
「これは？」
「知り合いからもらった猪肉を細かく刻んで、同じく刻んだ北方玉ねぎと混ぜて、パンの粉をまぶして揚げたものです」
「――こんな料理が」
これにはセリアも驚きを隠せない。
自分も台所を任されて長いが、こんな料理は全くと言っていいほど知らなかった。
種族は同じ森人であるから、森人伝統の料理とかならセリアも知らないはずはないの

だ。

「これは、誰から教えてもらった――いえ、どこの料理なんですか？」

もしかしたらこれは〝聖域〟独自の料理――恐れ多い神聖な料理なのではないかとも思い、ヒューイに問いかける。

「いえ、自分でいつの間にか作れました」

「――!!」

これが才能か!!とセリアに衝撃が走った。

セリアもアレンジ位はできるが、自身の感性だけでこんな斬新で新しく、そしておいしい料理を創作するだけの腕前はなかった。

これが神にも等しい時を生きる古森人のなせる業か、とセリアは戦慄した。

「祭りで食べやすいように、これをパンにはさんで売ろうと思います」

セリアの心境を知らないヒューイは、とどめとばかりに更なる改良案を提示する。

――なるほど、パンに、はさめば歩きながら食べやすいですわよね、とセリアは自身の自信が完璧に打ちのめされた状態で思った。

気高い身分でありながら優しく親しみやすく、そして腕っぷしも強ければ料理の腕もプロ並み。セリアは、本当にこの青年は何者なのだろうかと感じた。

「――ちなみにこの料理の名前は何と言いますか？」

「『かき揚げ』と『メンチカツ』です」

……to be continued

第六話「感謝祭と影」（Ⅰ）

感謝祭を明日に控えたその日の朝、ヒューイが日課をこなしていると、ふと視線を感じた。
気になってそちらに目を向けると、そこには物陰からこちらを見つめる幼い瞳があった。
「――マリア、おはよう」
「わわっ、ばれてたのです！」
話しかけられたことに驚いたマリアが、慌てて飛び出してきた。
「――あの、邪魔するつもりはなかったのです」
少し気を落とした様子のマリアに対し、ヒューイは優しく語り掛ける。
「大丈夫、丁度今切り上げようとしていたところだったから」
「そうなのですか？」
「うん。だから朝ごはんまでの間、少しお話していようか」
そう言ってヒューイは、近くの段差に腰を下ろす。

「はいなのです！」
　それを見たマリアも、ヒューイの隣に嬉しそうに座る。
「さて、何を話そうか」
　そう試案するヒューイに、マリアがこう話しかける。
「あの、お兄さんはなんで毎日特訓してるのですか？」
「……特訓、特訓か」
　マリアの中では、ヒューイの日々のトレーニングは特訓に見えたらしい。
　確かに普通のヒトから見たら特訓といっても差し支えのない量の鍛錬かもしれない。
「そうだな、これ以上弱くならないためかな」
「やらないと弱くなるのですか？」
「うん。弱くならないようにするのって実は意外と大変なことなんだって、俺は教わったな」
　ヒューイはなるべくマリアにわかりやすい言葉を選ぶように気を付けて話す。
　遠くで登りはじめた赤い朝日に目を細めながら、ヒューイは続ける。
「弱いままでいるっていうのは、すごく悔しいことなんだよ」
「悔しい、ですか？」
「そうだね、例えばマリアがお菓子を食べたくて、お菓子の上がってる棚に手を伸ばす。

けど身長が足りなくて届かないときどう思うかな？」
「……すごく悔しいです」
「でしょ？弱い時っていうのは、そういうもうちょっとに届かないことなんだ」
　もう少し強ければ、勝てた。もう少し強ければ、勝ち取れた。――そして、もう少し強ければ、守れた。
「そういう気持ちにならないために、特訓するんだよ」
「――よくわかんないです」
　ヒューイとしてはわかりやすい言葉と表現を使ったつもりだったが、なかなかそう上手くは伝わらなかったらしい。
　子供ってのは難しいなと、ヒューイは思う。
「まぁ、今はわからなくてもいいさ。マリアが大きくなった時に思い出してくれればそれでいい」
「なのです？」
　そう言ってかわいらしく小首をかしげるマリアに、ヒューイは微笑む。
「あ、あとですねお願いがあるのです」
「ん、なんだい？」
　そう言って問い返すと、マリアは少し遠慮がちにこう言った。

「お兄さんの剣、触ってみてもいいですか？」
これにはヒューイも少し驚いたが、年頃の子供ならそんなものかと勝手に納得する。
ヒューイにとっては、年頃の少年も少女も同じような位置づけなのだ。
「いいよ。けど危ないから鞘からは出さないでね」
そう言って腰に佩いた剣を抜き、マリアに差しだす。
マリアは少し緊張した面持ちで受け取ると、困惑した表情をした。
「あ、あれ？」
「ん、どうした？」
「この剣、思ったより軽いのです」
剣とは通常全部が鉄でできている為、その重量は生半可なものではない。
なのにこのヒューイの剣は、軽い――いや、確かに重くはあるのだが、全部鉄でできているにしては、不自然なまでに軽いのだ。
マリアでもぎりぎり振れるくらいには。
「あぁ、実はこの剣には秘密があってね。なんだと思う？」
「う～ん」
「じゃあ、ヒント。柄をよく触ってみて」
「柄？」

そう言ってマリアはその黒い柄の方をよく触ってみる。
「柄と刃は同じ素材だよ」
「う～ん」
マリアにわかったのは鉄ではないこと、ひんやりしていること、肌に吸い付くような感触があること。それらを統合しても正体がわからない。
最終的に一番近そうな素材の名をマリアは告げる。
「もしかして、木ですか？」
一番近そうだが、近そうなだけでたぶん違うであろう素材の名前をいう。
果たして正解は――
「正解。木だよ」
「え!?」
まさかの正解にマリアの方が驚く。
今持っているソレは確かに鉄よりは軽いが、木材として考えると驚くほど重いし――そして何より色が違う。
マリアはこんなに黒い木を見たことがなかった。
そのマリアの驚きを知っているヒューイは、詳しいことを続けて教える。
「それは、『剣樹』っていう木でできているんだ」

「剣樹ですか？」

その問いにうなずくヒューイ。

「剣樹は黒剣の杜固有の植物で、剣みたいに重く硬く鋭いって性質があるんだ」

補足するなら、黒剣の杜がそう呼ばれる最たる理由がその剣樹だ。

黒く重く鋭い剣のような枝葉を無数に伸ばす、漆黒のこの木が無数にあることが名前の由来だといわれている。

黒剣の杜に自生する木々のおよそ九割がこの剣樹――いや、剣樹になるのだ。過去に実験として外界の植物を黒剣の杜に植えてみたところ、発芽したその芽は黒く変色していたのだ。苗を植えた場合でも、ある程度成長すると黒く鋭く変化し、どの植物も全てやがて剣樹になってしまう。杜が、生態系を支配・コントロールしてしまうのだ。

そして、その剣樹はとても生命力が強く、剣として加工されていてもなお生きている。

水分と日光さえあるなら、些細な損傷は自力で修復してしまうし、地面に刺して三日放置すると根が生える。

その性質は、ある意味〝魔剣〟といっても差し支えはないだろう。

だが、そんな剣が多く流通していいわけがない。

黒剣の杜の固有の動植物には厳しい輸出制限がかけられていて、多くのものは滅多に、一部のものは全く流通しない。

ヒューイのこの剣も、市場には一切流通していない希少なもので、一部が森王の近衛騎士団に称号とともに贈られるにとどまっているという貴重なモノであったりする。
「珍しい剣なのですね！」
「あぁ、修業時代から使っている相棒だ」
――最も今ここにいる二人はその価値について全く分かっていないが。
そうして話し込んでいると時間はあっという間に過ぎ、丁度いい時刻になっていた。
「さて、そろそろ朝ごはんだ。話の続きはまた今度にしよう」
そう言って席を立つヒューイだったが、その時マリアの顔に暗い影が下りる。
「――〝また〟って、いつくるのですか？」
「……マリア？」
そのマリアらしくない暗い声に思わずヒューイが振り向くと、俯いて唇をかむ少女の姿があった。
「お兄さん、もうすぐ行っちゃうんですよね。それまでにその〝また〟はちゃんと来るのですか？」
普段のマリアからは考えられないほどのか細い声だった。
その声を聞いて、ヒューイは思わず頬を掻く。
（やれやれ、どうしてこうも懐かれたかな）

うれしいやら、恥ずかしいやら、申し訳ないやら。
色んな気持ちがあふれてくるが、不思議と悪い気はしなかった。
「大丈夫だよ」
そう言ってマリアの前にしゃがみ込み目線を合わせる。
「大丈夫、出発までにちゃんと時間は作る。約束だ」
「……ほんとですか？」
そう言ってマリアは顔を上げる。
「本当だ」
それに対してヒューイは優しく答える。
「なら、ついでにもう一つ約束してください」
「……また、会いに来てくださいなのです」
マリアがすがるような視線をヒューイに贈る。
この視線はだめだ、とヒューイは思った。断ることなんてできないと。
「――あぁ、約束する」
だからこそ、ヒューイはマリアに嘘を吐く――優しい嘘を。
この旅の終わりに何が待っているのか、ヒューイには想像もついていない。ただ一つ分かっているのは、旅がどれだけ長くかかるかだけだ。もしかしたら終わりなんてない

のかもしれない、ということも。
故にヒューイは、一度訪れた場所に再び戻ることはないだろうと感じている。
だからこそ、嘘を吐いた。少女を傷つけないために。いつか時が流れて緩やかに自分のことなんかを忘れてくれると願って。
……ｔｏ　ｂｅ　ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ

第七話「感謝祭と影」（Ⅱ）

■□■

「――さて、こんなもんかな」

時刻は陽刻の十一（午後二時）。

気持ちのいい秋晴れの空の下、ヒューイは完成した自分の露店を見てひとりごちる。

収穫感謝祭はいよいよ明日、その為主な舞台となる大通りや広間では各人による露店の設営が始まっていた。

あちこちで響く金づちの音や、活気のある人々の声が、否が応でも祭りが近づいてきていることを感じさせる。

こういった祭りに参加するのは、実は人生初体験のヒューイは内心かなりわくわくしていた。

「料理の材料は多めに仕入れておいたけど、早く店じまい出来たらマリアと回るのもいいかもしれないな」

早く終わらなくても祭りは二日間ある。二日目には出店の予定はないので、その日は

マリアに丸一日付き合う予定だ。
ならばと、今日の残りの時間は祭りの下見に当てようか、と露店街に繰り出そうかと考えた。
だがしかし――
「……こんな奇麗な秋晴れもそうそうないよなぁ」
空を仰ぎ見てそんなことをつぶやく。
確かに見事な秋晴れだ。気温も暖かで心地よい微風も吹いている。これはさぞ――昼寝をしたら気持ちがいいに違いない。
ライオネルは今回出店しないし、セリアは祭りの最終調整を任されているらしく手伝える感じではないし、他にこれといって知り合いはいないし、と心の中で着々と理論武装を始めるヒューイ。
そして出した結論は――
「よし、昼寝をしよう」
早々にそう結論付けたヒューイは、昼寝によさそうな場所を探してその辺をふらつくことにした。
あちこちで人が世話しなく動き回る姿を横目に、祭りの中心地から徐々に離れる。
あの露店は衣類を、あの店は菓子を、といった具合に露店の下見もついでに兼ねる。

二日目にはマリアに付き合いつつも、旅に必要なモノも買いそろえなければと思う。
村中を歩いてみると、今までと比べて人が増えているのが分かった。
村人が普段よりも活発に動いているから多く見えるというのもあるだろうが、近隣の村からの出稼ぎや、親戚の手伝いで来ている人も多いのだろう。
「山賊がいなくなったことも大きいかな」
感謝祭本番の夜には、この村特産のシードルがふるまわれるらしいから、更にこれから増えるだろう。
ギムも、ただ酒目当てで来たと言っていたから、おそらくこの辺では有名なのだろう。
そんなことを考えていると、いつの間にか教会の近くまで来ていた。
「確か庭にいい感じの木陰があったな」
そう言ってヒューイが教会に近づくと、そこには見慣れない人影があった。
その人影は、やたらと体格がいい男――ギムであった。
「ギム、どうしてこんなところに？」
そう思い近づくと、こちらの接近に気が付いたギムが振り返る。
「お、丁度いいところに来たな」
「ってことは俺に用か？」
「応、今暇か？」

そう言ってにかっと笑うギムに対して、嫌な予感を感じたヒューイ。
「暇じゃない」
「マジか、何の用だ？　なんか手伝えることあったら言ってくれ」
「いや、これから昼寝するという大事な用があるから帰ってくれ」
「――ふざけてんのかテメェ」
怒ったように語気を強めるギムに対し、ヒューイは真顔でこういった。
「いたって真剣だが？」
「ちぇ、友達の頼みぐらい聞いてもいいじゃねぇか」
「友達、って誰の事だ？」
「――お前、本気で言ってる？」
その図体に似合わぬ、拗ねたような言い方に、思わずヒューイはクスリと笑ってしまう。
「冗談だよ、どんな用だ？」
ヒューイは観念したように、ギムに要件を問う。
「いやなに、暇ならいつかの約束を果たしてもらおうかと思ってな」
「約束？」
はて、何か約束などしただろうかとヒューイは内心首をかしげる。

その様子に不穏な予感を感じたギムは、慌てたように続ける。
「忘れたとは言わせねぇぞ、手合わせだよ、手合わせ」
「――あぁ、そんなことあったな」
それはあの山賊退治の夜。その場に突然現れたコイツと、そんな口約束をその場の流れでしたっけな、とヒューイは思い出した。
「この祭りの前に是非ともと思ってな、今来た」
「別に今じゃなくてもいいだろう？」
この感謝祭が終わったら、ギムと一緒に馬車で北都に向かう予定になっている。
その間は三日も、否が応でも顔を突き合せなきゃならない。その時でいいじゃないかと感じたのだ。
「――いや、今がいい」
そう言うギムの表情はかつてないほどに真剣だ。
何か事情があるのか？
「……了解、仕方ないな」
ギムのただならぬ雰囲気を察して、ヒューイも覚悟を決める。
「恩に着る」
□■□

二人は教会の庭で、間隔を取って向かい合った。
「ルールは、どうする？」
ヒューイは、腰に佩いた剣を抜きながらそう問う。
「先に一発有効打を当てた方が勝ちでいいだろ」
その問いに、ギムは両手に籠手をはめながら答える。
「寸止めでいいか？」
「できるか？」
「――舐めるなよ」
二人の間に先ほどまでの気の抜けた、打ち解けた空気は既にない。
もし仮に、第三者がこの場にいたとしたら卒倒していたかもしれない。
――それほどまでの、濃密な殺気がその場を支配していた。
ヒューイもギムも、感づいている。
ヒューイは故郷の師匠以来の強敵の予感を、ギムは銀の一等級に昇格してからしばらく出会ってない同格以上との闘いを感じ取って。
愛用の左右でデザインの違う籠手をはめ終え、拳を前に出し半身に構えるギムに応じて、ヒューイも愛剣を両手で構える。
そして、教会の庭を静寂が支配する。

二人とも動き出さないが、二人での間でのみ、既に戦いが始まっていた。
どこをどう動けば、相手はどう動くか。お互いの間でチェスのような頭の中での駆け引きが続いていた。
そして、その静寂を最初に破ったのはヒューイ。切っ先を前に構え、姿勢を極限まで低くしてギムの間合いに突っ込む。
間合いに入った途端に鋭い突きが首元を狙って放たれる。
それをギムは左手の籠手を使って防ぐ。
ガキンという音がしてヒューイの剣が弾かれ――ない。
ヒューイは直前に刃を引き返す――フェイントだ。
そしてそのまま姿勢を更に低くし、ギムの足元に滑り込み、右足を鎌のように伸ばして足払いをかける。
その足払いが完全に不意打ちだった。たまらず地面に転がるギムに対し、ヒューイはそのまま馬乗りになって勝負を決めにかかる。
馬乗りになったヒューイの顔に向かってギムは右手の拳を突き出す。
突き出した拳――いや籠手の先からカチリという音。
まずい、そう感じて飛びのくヒューイの頭があった部分に、籠手から飛び出した刃が突き刺さる。

「――手甲剣か、仕込み式の」
ギムの右手の籠手飛び出した幅の広い剣をみて、ヒューイはひとりごちる。
手甲剣とは、文字通り手甲と剣が一体化した攻防一体の剣だ。
ギムの籠手のデザインが左右で異なっていたのは、右側が仕込み式の手甲剣だったからであった。
「まさか、こんなに早くネタ晴らしすることになろうとは思わなかった」
ギムが、まさしく想定外だという顔をしてつぶやく。
彼にとっての隠し玉が、あっさりと不発に終わったことが信じられないといった顔だ。
「ていうかテメェ、殺す気だったろ！　容赦なく急所を狙いやがって！」
「本気じゃない方が失礼じゃないか？」
「そりゃそうだがなぁ！」
そういってまたお互い構えなおす。
そして二人は駆け出して、再び数度打ち合う。
攻撃と防御は何度も反転し、しかして有効打もまた出ず、打ち合う激しい音が周囲に響く。
その中でヒューイがとうとう師から授かった技を繰り出そうと、再び一度距離を取ろ

うとしたその瞬間。
「チェックメイトだ！」
その隙を逃さず、ギムは腰から筒状のモノを取り出し、左手でそれをヒューイの頭の方へ差し向けた。
「――俺の負けだな」
その瞬間、ヒューイは動きを止め、己の負けを認めた。
「――驚いたな、抜いてみたものの、これが何かわかるのか？」
「銃、だろ？」
それは紛れもなく銃であった。
かってこの世界の前任者たちが使ったといわれる武器の一つで、その製法は彼らの絶滅とともに失伝したとされていた。
「……いや、正しくはそのまがい物だがな」
「まがい物？」
「最近、一部の鉱人達が、銃の研究をしているようでな。で、これはその失敗の産物」
確かに、ヒューイの知っている銃と比べると幾分簡素なつくりに見えるが、それが失敗作？――そうヒューイは思った。
「射程は弓以下、攻撃力は剣以下、そして一発限りの使い切りでコストも高い。どうだ、

失敗作以外の何物でもないだろ？」
「確かに」
「知り合いの鉱人から譲ってもらったんだが、使いどころが今までなくてな」
「――それが今だったな」
　しかしそんな劣化銃でも剣の外の間合いで急所を狙うのなら、それは必殺だ。
「こんな幕引きで悪いな、これ出さないと負ける――ってかほんとに殺されそうだあと思ったからよ、出してる殺気的に」
「いや、奥の手切らずに済んでこちらも助かった――、とっさにやろうと思ったものの、寸止めする自信はなかった」
「おいこら」
　二人はさっきまでの殺気はどこへやら、その姿は普段の気さくな友人同士のように戻っていた。
　しかし、そんな中でギムは気づいていた。
　ヒューイは下手をすると弾丸を避け、こちらを仕留められたのではないかということに。
　これは、本当に殺しあったら負けるかもな――、そうギムは思い背筋を寒くした。
……ｔｏ　ｂｅ　ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ

第八話「感謝祭と影」（Ⅲ）

■□■

そしてとうとうやってきた感謝祭当日。

山賊がいなくなったことで、近隣の村からも観光客がやってきて、村はとても活気づいていた。

奇麗な秋晴れの下、ヒューイの店はそこそこ繁盛していた。

理由としては単純にヒューイの出す料理が物珍しく、おいしそうであったこともそうだが、ヒューイの格好の不自然さがこの日に限って言えば緩和させているということだろう。

いや、ヒューイの格好自体は特別変わってはいないのだが、いつもだとどうしても浮いてしまう仮面も、祭りの席というのであれば話は別だ。

まぁ、そんなこんなであらかじめ用意していた三十食のサンドウィッチは瞬く間に売り切れようとしていた。

「おう、あんちゃん繁盛してんな！」

そういって残り数個となったところで、見知った人物がやってきた。
「――あぁ、ライオネルさん、いらっしゃい。一つどうですか？」
「ん？じゃあ肉の方貰うか」
そう言われてライオネルに最後のメンチカツサンドを渡すヒューイ。
「これ、幾らだい？」
「あ、お題は結構です。もう十分稼がせてもらったので」
「おぉ、豪気なこった」
事実、今日これまでの売り上げだけでしばらくは困らないだけの旅費は稼ぐことはできていた。
ギムから前借したぶんも合わせると、必要なもろもろを買っても大分手元に残る計算になる。
「それにお世話になった餞別も兼ねているんで」
「――そっか、あんちゃんは祭りが終わったらもう」
「はい、明後日にはここをたつ予定です」
どこか残念そうなライオネルに対し、そう言い切るヒューイ。
「何も急すぎやしないか？そんなに急ぐ旅なのかい？」
「いえ、そうでもないんですが、山賊たちをいつまでも村の中に置いておくのもリスク高

いでしょう？」

そう、ヒューイには今現在、ギムとともに山賊たちを北都の組合に届けるという役割があった。

山賊たちの食べる食料に、寝床の確保、更に脱走した場合に近隣住民に及ぶ危険性など、彼らを長くここに置いておくことに関しては百害あって一利なしといったところだった。

「いやまぁ、そうなんだが、ちょっとマリアのことを思うと残念だなと――」

あぁ、そういうことかとヒューイは納得した。――が、同時に少々解せないと思った。

確かに自分はマリアになつかれているが、マリアは見た感じ誰にだって優しいし、なついているように見える。

自分がマリアにとって、そう特別とは思えなかった。

「――マリアがどうかしたんですか？」

「いやなに、あんなマリア俺は初めて見たんで、そんなマリアを引き出したあんちゃんがいなくなるのは残念だって思ったのさ」

「――あんな、マリア？」

明るく、聡く、みんなに優しく、好かれているマリア。そんな彼女を当たり前だと思っていたヒューイに、その言葉は少々衝撃的だった。

「マリアって、凄く頭のいい子だ。だからか俺らに対してはどこか遠慮してる風な時が多くてよ。それこそ年相応にはしゃぐ姿なんて、あんちゃんが来るまでは見たことがなかった」

ヒューイが当たり前だと思って見ていたマリアの姿が、実は真実ではなかった。

いや、逆か――、ヒューイがマリアの本質を、子供らしさを引き出したのか。

「だから、また今度この辺を通りかかったらマリアを訪ねてくれないか?」

「それは――」

「しがない近所のおっさんの、まぁ親心だと思ってくんな」

そういってライオネルは立ち去る。

ヒューイにまた、果たせそうもない約束を残して。

「――マリア、お前は恵まれているな。色んな人に想われているぞ」

□■□

そして祭りは一日目の夜を迎えた。

中央の広場では村名産のシードルがふるまわれて、その活気は最大級に達していた。

「うわっ、すごい酒気だ」

料理を売り切り、露店のあとかたづけを終えたヒューイがその場に来た頃には縁もたけなわ――あちらこちらに酔っ払いが続出していた。

黒剣の杜で酒とは無縁の生活をしていたヒューイは、広間に充満した酒気に若干顔をしかめた。
そんな祭りの中央ステージではメインイベントである飲みの大会が行われていた。
ルールは単純明快。相手と飲んで潰せば勝ち。
現在は昨年チャンピオンというライオネルさんと、今年ただ酒目当てで飛び込んだギムが独走していた。
「師匠が見たら野蛮なっていいそうなイベントだな、これ」
そうボソッとしたヒューイのつぶやきを聞き逃さなかったものがいた。――ライオネルである。
獣人独自の鋭敏な聴覚でその声を聞き取ったライオネルはステージ上から目ざとくヒューイを見つける。
「おおっと、そこにいるのはヒューイ君じゃありませんか！ヒック、こっちで一緒にのもうぜおい！」
完全に出来上がっていた。
「――いや、俺は酒って飲んだことがないので」
「おおっとそれはいけない！漢たるもの酒を足しなまないと！」
ステージ上から完全な絡み酒を見せるライオネルに、あきれ顔のヒューイ。

昼間はかっこよかったのに、どうしてこうなったと考えざる負えない。
「がははは、ヒューイは味覚はおこちゃまだったか！」
そこに茶々を入れたのは、同じく大分出来上がっていたギムである。
「あ〟？」
恩のあるライオネルに言われても我慢できたことだが、ギムに言われるとムカッと来る。
ヒューイ自身もだんだん、この場の雰囲気にのまれ始めた。
「――やってやるよ、飲めばいいんだろ飲めば!!」
「お、いいね。ささ、駆け付け一杯！」
「よこせ！」
ギムが寄越した杯をふんだくるようにヒューイは掴むと、それを一気に煽った。
この村特産のリンゴの香りが鼻を抜け、独特の苦みのあるさわやかな味がした。
「うまい！」
「おぉ、森人の癖していける口だねぇ、なら勝負と行こうか！」
ギムのその提案にヒューイは首を縦に振って答える。
「俺も参戦するぜぃ！」
そこにライオネル悪乗りする。

「すぐに潰してやるから覚悟しろよ！」

「――ば、馬鹿ｎおろろろろろ」

「――こんなはｚおろろろろろ」

数刻後、ステージ上で醜態をさらす二人のバカがいた。

ライオネルとギムである。

「こ、この俺が負けるだなんｔおろろろろろ」

――と、口から見苦しいものを吐きながらライオネルが言う。

「森人って酒に弱いんじゃなｋおろろろろろ」

――と、同じく醜態をさらしながらギムが言う。

森人は酒に弱い。――これは、鉱人は酒が好きのと同じくらい世の中に浸透している常識だ。

もともと森で自然とともに生きてきた森人は、酒精と縁のない生活をしていた。

その為、種族単位で耐性が付いていないのだ。

しかしながら、何事にも例外っていうのがあるので――。

その二人を見下ろしながら、ヒューイは飄々とした様子でこう言う。

「情けない、大の男が酒なんぞで簡単にのびて」

先ほどの意趣返しとばかりにいうヒューイ。
その顔は、酒豪二人を潰したあとだというのに素面と変わらない様子であった。
――そう、今まで酒を飲む機会がなかった故自覚なかったが、彼は、ザルを超えたワクなのであった。
「――まだまだいけるぞ？」
「やめてくれ！　明日の分がなくなる!!」
そのライオネルの悲鳴をもってして、感謝祭の一日目は終了した。
……ｔｏ　ｂｅ　ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ

第九話「感謝祭と影」（Ⅳ）

■□■

そして明けた感謝祭二日目。

この日はマリアと約束したように、朝から二人で感謝祭を歩いていた。

「お兄さん、あっちで売ってる焼き菓子がおいしそうなのです!!」

「マリア、まずは手元のリンゴ飴食べ終えてからにしなさい」

本日もまた晴天であり、活気も昨日より多い会場を巡る。

マリアは、この日の為に貯めたお小遣いを使って、まるでこの感謝祭のお菓子を全種食べつくさんとばかりに食べている。

朝ごはんもしっかり食べたのに、何故そこまで食べれるのかを聞いたら、〝甘いものは別腹〟なのだそうだ。

「よしマリア、このお菓子は俺が買ってあげよう」

「ダメなのです！　お兄さんはビンボーなのですから、逆にマリアが奢ってあげるのです！」

そういってマリアは露店のおっちゃんに、焼き菓子を二つ注文する。
「……」
ヒューイは、酷く悲しい――情けない気持ちになった。
これからは、絶対財布を落とさない、無くさないと固く心に誓った。
「はい、お兄さん焼き菓子なのです」
「――あ、あぁ」
マリアは買ってきた焼き菓子をさっそくヒューイに渡す。
情けない自分はこの際置いておくとして、少女の好意を無下にはできないヒューイは、それを受け取り、パクリと齧る。
小麦色の焼き菓子の中には焼きリンゴが入っていて、特有の甘酸っぱい、懐かしい味がした。
「――なるほど、カスタードのないアップルパイみたいなものか」
「かすたーど??」
「なんでもない。――おいしいよ、ありがとうマリア」
「えへへ、こちらこそなのです」
そういって前を向いて歩きだすマリアについていく。
そういえば、何故この味を懐かしいと感じたのか、それをヒューイが思い出す。

――アップルパイは、確か彼女の好物で昔はよく作ってたな、けどカスタードが入ってないことによく文句をつけていたっけ、と。
（いや、カスタードの作り方お互い知らなかったんだから仕方ないじゃん、むしろ蜂蜜とかで代用しようと試行錯誤してた俺を褒めるべ……き――）
――彼女……。
――彼女とは、誰のことだ……？
その瞬間、ズキリと頭がひどく痛むのをヒューイは感じた。
「――っ！」
失われた過去を思い出そうとすると時々起こる酷い頭痛。
周囲の景色が揺らぎ、目の前が点滅するほどの強い頭痛だ。
思わず立っていられなくなり。片膝をつく。
（――大丈夫だ、落ち着け。こんな時の対処法はわかっているだろう）
目をつぶり、深く大きく深呼吸をしながら、ゆっくりと思考をソコから切り離す。
そして過去から目をそらして、目の前の今を強く意識する。
目を開けると――ほら、元通り。
「――お兄さん、どうしたのですか？」
目を開けると心配そうに見つめる幼い瞳があった、マリアだ。

「大丈夫だ、ちょっと靴紐がほどけてしまってね」
せっかくの感謝祭だ、心配をかけさせまいと嘘を吐いてすぐに立ち上がる。
そしてマリアを連れて歩き出そうとしたその時だ。
「――ん？」
遠くで不自然な人影を見つけた。
それは、人ごみの中できょろきょろと周りを見回しては走るライオネルの姿だった。
――誰かを探しているのか？
「あ、ライオネルさんなのです！」
同時に見つけたらしいマリアがライオネルに向かって大きく手を振る。
するとそれに気が付いたライオネルが――いや、マリアというより、隣に立っているヒューイに気が付いた風のライオネルが、こっちに走ってやってきた。
「おい、あんちゃん大変だ！　さん――」
ライオネルはそこまで言いかけて、となりにいるマリアを見て言葉を止める。
マリアの前ではできない話のようだ。
「マリア、少しあっち行っててくれないか？　大事な話があるみたいだから」
「ん、わかったのです」
そういってマリアが少し離れた露店の方へ行ったのを確認して、ヒューイはライオネ

ルに向き直る。
「――で、どうしたんですか？」
　するとライオネルはひどく慌てた様子でこう話した。
「どうしたもこうしたもねぇ、山賊どもが逃げ出した！」
　そのセリフに絶句するヒューイ。
「何故だ、鍵は？」
「外から壊されていた」
「外にまだ仲間がいたのか！」
「――いや、多分違う」
　すると更に深刻そうな顔でライオネルがこういった。
「頭目を含めた一部の山賊が小屋の中で殺されていた。仲間なら多分こんなことはしないだろう」
「……」
　ならば、犯人の目的はなんだ？
　――いや、それよりもまず。
「ライオネルさん、このことは今誰に話していますか？」
「とりあえずセリアの判断で、若い衆には話して、急いで村中を警戒してもらっている。

観光客には伏せてある」
「賢明な判断ですね」
彼らが感謝祭でトラブルを起こしさえしなければ、最悪、山賊は全員逃がしてしまってもいい。
今、一番怖いのはパニックだ。
この感謝祭に来ている観光客全員がパニックに陥れば、大惨事が起こりかねない。
「あんちゃんも手伝ってくれるか？」
「あぁ、でも先にマリアを安全な所へ」
「もちろんだ、今セリアがいる中央の広場が一番安全だと思うから、そこに向かえばいい」
「ありがとうございます」
ヒューイはライオネルにそう礼を告げて、マリアの元へ向かう。
「マリア、なんかセリアさんがマリアを呼んでいるみたいだから、一緒に広場へ行こう」
「？　わかったのです」
少々疑問に思ったみたいだが、マリアも納得してついてきた。
その途中でも多くの人とすれ違ったが、パニックの気配はない。
緘口令はしっかりと聞いているようだった。

マリアに事件を気取られないように、それでいて急いで広場へ向かう。
しかし、もう少しで広場ってところでまたしてもヒューイは見知った人物と出会った。
「！　丁度いいところであったな!!」
「――ギムか。急いでいるんだが？」
唐突に会ったギムは、マリアに話を聞かれないようにヒューイに顔を寄せてこういった。
「ライオネルから話は聞いている、山賊共が逃げたんだってな」
「あぁ、マリアを安全なところに届けたら、俺も手伝う予定だ」
「なら話は早い」
そう言ってギムは向こうの路地裏を指刺す。
「向こうの路地裏に、さっき何人かの怪しい男たちが入っていくのが見えた。奴らかもしれない、手伝ってくれるか？」
「……いや、マリアを届けるのが先だ」
「先に奴らをどうにかして、目先の安全を確保したほうがいいんじゃないか？」
「――」
ヒューイは少しの間考える。

逃げるだけの山賊たちはたぶん放っておいても安全だ。
この場合、一番危険なのが、奴らを解放した犯人だ。
山賊たちの仲間ではないにもかかわらず、奴らを解放して、場合によっては殺しも辞さない危険人物。
その路地裏へ向かった中に、その犯人がいたとしたら――。
「――悪い、マリア。少しここで待っていてくれないか？」
「どうしたのです？」
「ギムと少し用事をかたずけてくる」
それに喜んだのはギムだ。
「お、いいのか？」
「あぁ、仕方ない」
そのやり取りに疑問を持ったものの、深く追求せずにマリアは――
「わかったのです」
――と返事をする。
「じゃあ行くぞ、ヒューイ」
「あぁ！」
そう言って路地裏に駆け出す二人。

「――あの、お兄さん!!」
その瞬間、ヒューイはマリアに呼び止められる。
「どうした?」
「あの、帰ってきたら、いっぱい、いっぱい埋め合わせしてくださいね、お願いですよ!!」
幼いながらに何か感じることがあるのだろうか、マリアは必至そうにそう言ってきた。
「――約束する」
ヒューイはマリアにそう言って、今度こそ路地裏に入っていった。
二人の入っていった路地裏は不気味なほどに、シンと静まり返っていた。
人の気配などまるでしない。
表の喧騒が嘘のような――、ここに人が入ってきたのが嘘のような静けさだった。
「――なぁ、ギム。ここに本当に奴らが入っていったの――がっ!!」
突如、ヒューイの後頭部に強い衝撃。
一気にヒューイの視界が暗転し、地面に衝突する。
「――悪いな、これも仕事なんでな」
そういうギムの声を聞きながら、ヒューイの意識は闇に飲まれた。
……to be continued